

ガイド

小林有也の略歴

小林有也についての研究は多くはない。旧松本市史下巻の人物誌は5p余をさいてその功績をたたえている。

平成8年刊行の「深志人物誌Ⅱ」には詳しくその生い立ち・小林有也初代校長小伝が掲載されており大変参考になる。ここでは「深志人物誌Ⅱ」の小林有也初代校長小伝によって紹介してみたい。

農商務省出仕当時→



1. 小林有也の生涯

小林有也先生は、幼名を卯之助といい、列強諸外国の圧力で、幕府が米・英・露と和親条約を結んだ翌安政2年（1855）6月1日、いまの大阪府、当時1万3千余石の小藩であった伯太藩の重臣の長男に生まれた。10～11歳のころには、小姓として藩主渡辺氏につかえたが、明治を迎えて3年目、大学東校・南校ができ、南校が諸藩から貢進生を求めると、藩代表に選ばれ、15歳で出京。同年10月、大学南校の組織が変わると、貢進生から生徒となったため、苦しい生活を余儀なくされながらも、物理学・論理学・数学を攻究した。とくに、フランス語によって物理学を究めたことは、明治初年の進取的文明開化の風潮のなかで、自由で、しかも、合理的な考え方を体得することとなり、明治13年7月、25歳で理学士となって卒業した。わが国最初の物理学専攻の理学士19名中の一人である。

そして、明治14年5月、農商務省の工務局に勤め調査課、統計課、勸工課などに属し、わが国工業の進展に尽力した。その間、同年6月には、「東京物理学講習所」当時夜学校（一明治16年9月「東京物理学校」と改称）現東京理科大学設立発起人18名の代表的人物として、「理学の普及を以て国運発展の基礎とする」目的をもった同校の物理学教授の任に当たっている。だが、日本資本主義経済発達的前提となる最初の大きな不況のさなか、明治17年7月、工務局と同時に物理学校もやめ、中学校教則取調委員となって、長野県に赴任し、同年9月、長野県中学校を長野に誕生させると、校長と教諭を兼ね、ついで、19年9月、長野県尋常中学校が松本に置かれると、校長として松本に着任、以降、大正3年（1914）6月9日、60歳で在職中に逝去されるまで、実に29年間、中学教育の第一線で、生徒の育成にあたった。（「深志人物誌Ⅱ」22pより引用）

2 小林有也と松本城天守修理

明治維新後、天守閣は住む人も、修理することもないため荒廃してしまった。この時、天守閣を修理したのは松本尋常中学校（現深志高校）の校長小林有也であるが、そのいきさつを述べてみたい。

明治32年（1899）文部省は中学校の運動場は2千坪以上なくてはならないと通達



してきた。松本尋常中学の運動場は1500坪しかない。小林校長は松本城内堀を埋めて運動場にしたいと県に提案した。埋め立てには5万円もかかるため、県議会の賛成は得られそうもなかった。

押川知事は「松本農事協会に貸与してある本丸の植物試験場を運動場にしようではないか」と代案を示した。知事案に対し松本の町会議員や町民団体代表、旧家臣団体の六星会が知事に反対を申し入れた。町議会もたびたび開かれ「中学校の運動場になれば城跡は荒廃する。本丸は公園にして欲しい」と県に陳情をした。しかし、33年2月の県会で本丸は中学の運動場と議決された。小林校長は、天守閣保存を主張する町民の意志に深く思いを致し、本丸を校庭とし使用するとともに天守修理を決心したと考えられている。

小林校長は明治35年に町長となる小里頼永や中島郡長に天守修理保存を呼びかけた。かくして明治34年8月13日「松本城天守（閣）保存会」が発足し、明治36年より工事に入った。

3 明治の大修理の収支



寄付金が17,145円余で借入金を合わせて20,280円である。あと天守観覧料がここに使われている。寄付金中3,700円は松本市の補助金である。（「松本城天守閣保存会修繕費収支 明治34年~大正3年」）〔小里家文書（松本市文書館蔵）より作成〕

明治36年から修理に入ったが資金難にみまわれ、日露戦争もありたびたび工事は中断したが小林校長は募金に心血を注ぎ大正2年着工から足掛け11年で竣工した。明治の大修理の工事記録は今のところ見つかってはいないためその工法については不明な点が多いが、天守のゆがみを直し、巨材を添加し、ボルトを打ち屋根をふき替え、壁を塗り竣工を見た。

小林はこの心労がたたり、大正3年6月9日逝去され松本市中央竜興寺に葬られている。

